

令和7年度
地域循環共生圏づくり支援体制構築事業

中間支援ギャザリング資料（中間支援振り返りシート）

活動テーマ

『共同堆肥舎を中心とした
市民参加による地域循環型農業促進事業』

活動団体の活動地域：沖縄県中部地区

活動団体名：中部地区和牛改良組合

中間支援主体名：国立大学法人琉球大学

中間支援主体としての獲得目標と達成状況

■ 中間支援主体としての獲得目標 【R7年度当初目標】

- 琉球大学では、地域貢献をミッションに掲げているが、地域の農家との「知の共有」があまりなされていないのが実状である。中間支援主体が、積極的に農業生産現場へ出向き、地域課題に対する解決策を共に考え、課題解決に向かうよう舵取りをしていき地域から信頼される存在になる。
- 対話と協働のコーディネート力を向上させ、地域の多様性を活かした共創型の支援体制を構築していく。

■ 中間支援主体としての獲得目標に対する振り返り（目標達成状況）

共同堆肥舎設立に向けて

- ✓ うるま市の循環型農業推進協議会（4回/年）に参加し、共同堆肥舎の設立の必要性を提起した。補助金申請支援について、うるま市生産振興課と協議を重ね、最終的に市予算による建設の検討段階に至った。
- ✓ 活動団体の3名で農事組合法人を立ち上げることができた。その後、新たに7戸の農家の参画を得た。
- ✓ 農事組合の取組を第10回農水産業支援技術フェアにおいて紹介した。
- ✓ 共同堆肥舎建設予定地に隣接する地域において、区長及び住民を対象とした堆肥化に関する勉強会並びに共同堆肥舎を建設する意義について説明会を行う（2/26）

地域資源を用いた経産牛肥育について

- ✓ 食品残渣（パンやイモなど）を活用したエコフィードによる経産牛肥育を行い、6頭中2頭を出荷した。

中間支援機能ごとの振り返り

チェンジエージェント機能		R7獲得目標（R7年度当初設定） 高めたい機能（◎/○）とその理由		現状の自己評価（R7年度末時点） 自己評価（◎/○/▲）とその理由	
変革促進	物事を整理する				
	意味づける				
	癒しとなる				
	見通しをつける	○	「共同堆肥舎の運用ロードマップ」の提示	▲	補助金申請の件で時間を要したが、申請せず
プロセス支援	話を聞く	○	コアメンバーとの交流を深める	◎	活動団体のイベントに招待され交流を持てた
	場を開く	○	本音で語り合う場の設定	◎	農事組合法人メンバーを集めて交流した
	喝を入れる				
	現在地を確認する				
資源連結	新しい人を入れる				
	事例を紹介する				
	引き出す	○	共同堆肥舎への出資や運営責任に対し、農家が抱える潜在的な不安や期待を引き出す	○	資金確保が一番の悩みだが、市の支援が得られるかもしれない
	拡散する				
問題解決提示	文字や図に落とす				
	問いを立てる				
	会議を進行する				
	落としどころを探る	○	農家の要望と現実的な経営収支のバランスをとる	◎	コンサルタントとの連携により事業が成立する最適解を提示した
その他	※必要に応じて追加				

今後の中間支援主体のありたい姿

■ 中間支援主体としての本事業終了後の地域づくりへの貢献 【R7年度当初目標】

●活動団体が望む共同堆肥舎を地域に据え、家畜排せつ物の不適切な処理が解消され、堆肥を余すことなく活用し化成肥料の使用量を低減させ、耕畜連携が十分にできているといった、地域資源循環モデル地域を作り、これを県内各地域へ展開していくための支援を続けていく。

■ 地域づくりに貢献していくために、今後、どうなりたいか

目指す姿	目標達成に向けた、次年度の行動	チェンジエージェン ト機能での分類
琉球大学は、中部地区の食資源循環を担う多様なステークホルダー（畜産農家、耕種農家、行政、学校、市民、企業）が自走的に連携できるよう地域に伴走する中核として機能していきたいと考えている。	<ul style="list-style-type: none">・事業計画（堆肥舎運営）を立てるため、具体的な支出・収入の金額の積み上げに必要な情報を提供する。・耕畜連携に必要な堆肥の量や品質などを把握し、活動団体の堆肥舎運用モデルを描けるように支援する。	変革促進
共同堆肥舎建設に向け、また建設後の運用について、大学が持つネットワークを活かして対話の場を継続的に持つ。	<ul style="list-style-type: none">・ステークホルダーを集め、対話の場を大学が企画・運営し、地産地消につながる循環ルートを太くする・耕種農家へのヒアリングを大学が主導し行う。	プロセス支援

■ 地域づくりに貢献していくために、外部地域や関係者と連携や協力したいこと

学校や地域団体と連携し、市民向けのワークショップなどを開催し、食資源循環を理解し、地産地消が当たり前となる未来像を共に描き、地域全体の循環についての意識醸成を進めていきたい。